

特集

ご利用者のためにしていること～老健での取り組み～

地域に信頼される
老健としての
取り組み

医療法人瑞心会
老人保健施設サンバーデン
支援相談員（社会福祉士）

渡 邊 雄 太

当施設は、風光明媚な美浜町野間にある知多半島最南端の老健として、平成6年に開設された入所122床、通所定員30名の在宅強化型の施設です。美浜町の人口は約1万9千人、高齢化率は34.7%（令和8年7月時点）で県内でも高い割合となっています。

① 認知症啓発と地域貢献活動

当施設では、地域貢献活動として令和元年から認知症カフェ「バーデンカフェ」の開催を継続しています。施設で開催しているためコロナ禍では開催回数が減少しましたが、今年度からは地域の感染状況なども鑑みながら回数を増やしています。

参加者はこれまで幅広く、ご利用者やそのご家族、退所者のご家族、併設医療機関の医療スタッフ、居宅ケアマネジャー、行政、地域住民の

方など多くの方々に参加していただき、認知症についての周知啓発に力を注いでいます。

当施設の認知症カフェは開催当初から多職種が参加していることから、認知症に関する周知啓発以外の効果を感じるようになりました。例えば、退所されたご利用者のご家族からはグリーフケアにつながる相談や手紙をもらったり、認知症リハビリや認知症ケアについての質問を受けたりしたことがあります。他にも在宅復帰やターミナルケア、ACP、介護保険制度、感染予防や災害対策



など「老健の専門職による知識や技術」と「地域住民が抱えている貴重な想い」を伝えあうことがで

きる重要な情報発信、情報収集、情報共有の機会だということに気づかされました。

② 介護補助員の活動と地域における役割

他にも当施設では介護補助員（介護助手）らの趣味や経験を生かした活動が盛んです。



介護補助員が撮影した季節感や旅行気分を味わえるような写真を展示したり、ホームページにも使用したりすることで地域の特長を知ってもらう機会となっています。また、早朝から施設周辺の清掃やガーデニング、営繕、送迎など施設内外を動きながら、地域住民や他職員とコミュニケーションをとることでご利用者の見守りや防犯などにも波及効果があり、安心、安全に過ごすことができます。「地域のことをよく知っている介護補助員が地域の施設を支える」といった光景がみられ、人

材不足や高齢化が進んでいる当施設の地域においては欠かせない貴重な人財となっています。

地域に必要とされる施設になるためには、医療・介護の専門職だけでなく、サービスを展開するのではなく、ご利用者や地域住民に信頼される施設だと感じてもらうよう心がけながら、専門職以外の知識や経験が生かされるサービスを展開することが課題であると感じています。

地域のみならずと一様に思いやり寄り添い支え合いながら地域に信頼される老健施設としての理解促進、情報共有に努め、施設の理念である

「感謝報恩」を大切にしながら地域貢献に尽力しなければならぬと感じています。



ご利用者の「底力」に教わって

～あおみが目指す、日常に馴染むリハビリテーション～

JA愛知厚生連
介護老人保健施設あおみ
作業療法士

岡田 浩幸

地域に根差し、歩みを進めて



安城市にある介護老人保健施設あおみは、定員100名（うち認知症専門棟40名）の入所サービスと、定員60名の通所リハビリテーションを提供しています。理念である「ご利用者の自立を促し、家庭的な雰囲気の中で安心をお届けすること」に基づき、私たちリハビリ職は、日々ご利用者の生活に関わらせていただいています。その中で大切にしているのは、一方的にリハビリテーションを提供するのではなく、ご利用者自身が持つ力や、これまでの人生で培ってきた経験・役割を大切にすることです。人生の大先輩である

ご利用者の姿から、私たち自身も「自立とは何か」「その人らしく暮らすとは何か」を日々学ばせていただいています。



屋上庭園で、ご利用者の「昔の顔」に出会う

私たちは、身体機能訓練にとどまらず、ICF（国際生活機能分類）の視点からご利用者の「活動」や「参加」が自然に生まれるアプローチを心がけています。その象徴が、四季折々の花や野菜を育てる屋上庭園です。「何を植えるか」の相談から始まり、毎日の水やり、収穫、そして簡単な調理まで。土に触れ、成長を喜ぶ一連の営みは、リハビリ室とは違う生き生きとした表情を引き出します。「昔はこうやって料理したの」と思い出話（回想）に花を咲かせ、熟練の手つきで包丁を握る姿に、



私たちが驚かされることも少なくありません。刺激が少なくなりがちな施設生活において、多職種が連携し、心身機能をフルに活用できる「役割」や「楽しみ」を持っていたく伴走を大切にしています。

「やってみたい」を支える黒子の役割

最近、掲示物作成などの共同作業への自主的な輪が広がっています。リハ職は「黒子」に徹し、ご利用者の「やってみたい」をサポートします。認知症の方には複雑な工程を避け見本を用意し、片麻痺の方には片手でできる糊付けなどの役割を用意。こうしてできた合作がフロアを彩ることで、小さな社会に温かな一体感が生まれます。この明るい雰囲気の中で、背中を押され自主訓練に励まれる方も多く、リハスペースはいつも賑わうようになりました。こうした地道な積み重ねが、令和7年度の在宅復帰率約67%という、超強化型老健としての成果に少しで



も結びついていると考えています。

可視化することで深まる、納得と安心

通所リハビリテーションでは、リハビリテーションマネジメント加算を通じ、質の高い評価とフィードバックを心がけています。特に、タブレット端末を用いた写真や動画による状況共有は、ご本人やご家族から「分かりやすい」とのお声をいただいております。また、集団の良さを生かした展開を模索する一方、個々の生活課題にも踏み込んだ支援を実践しています。ご自宅での安全な生活をより確かなものにするため、生活課題に応じて、同事業所の訪問看護（訪問リハ）とも連携し、多角的なサポートを行っています。

今後の展望

今後の展望は、いかに個々の生活背景や価値観に寄り添えるかです。マニュアル通りではない「心に届くリハビリ」を模索し続けます。「あおみがここにあって良かった」とご利用者、地域の皆様に思っていただけけるよう、これからも職員一丸となって一歩ずつ進んでまいります。